

温泉コラム

● 第 6 回 ●

「帯広・十勝編」

札幌呼吸器科病院 薬剤部

河野文昭

(温泉ソムリエ・温泉保養士・温泉入浴指導員)

1. 帯広市内の温泉

帯広市を含む十勝平野の温泉ですが、前回の札幌編でも少し触れたように、十勝川温泉を中心とした高温のモール泉を多く湧出している事が最大の特徴と言えます。前回は駅前ふく井ホテルの大浴場写真(源泉温度45℃・加温・加水・循環なしの完全掛け流しの温泉)を掲載しましたが、帯広市は駅前のみならず、市内に同様の泉質を持つ温泉銭湯が随所に存在しています。その多くは褐色のモール泉ですが、場所によっては透明な温泉も湧出しています。

その一例として、帯広市内の住宅地にある白樺温泉を紹介しておきます。ここはpH9.4のアルカリ性単純泉で、若干モール泉らしい土のような香りはしますが、色はうっすら緑色をした透明な温泉で、ツルツルとした上質な肌触りがあります。源泉温度は44.3℃で、ふく井ホテル同様に加水や加温もない手付かずの源泉がそのまま使用されています。カランのお湯にも温泉が使用されている為、豊富な湯量がある事が判ります。香りや浴感も含めて、大変素晴らしい温泉です。

帯広市の温泉に関しては私自身もリサーチ不足なので、市内にある温泉についてあまり多くを語ることはできないのですが、朝風呂で利用した光南温泉も44.1℃と適温で湧出しており、恐らく帯広では市内各地に点在する温泉銭湯の多くが、このような好条件でお湯を提供しているのではないかと思います。



参考資料①：帯広市内にある白樺温泉。町の銭湯然とした佇まいだが、源泉かけ流しである。

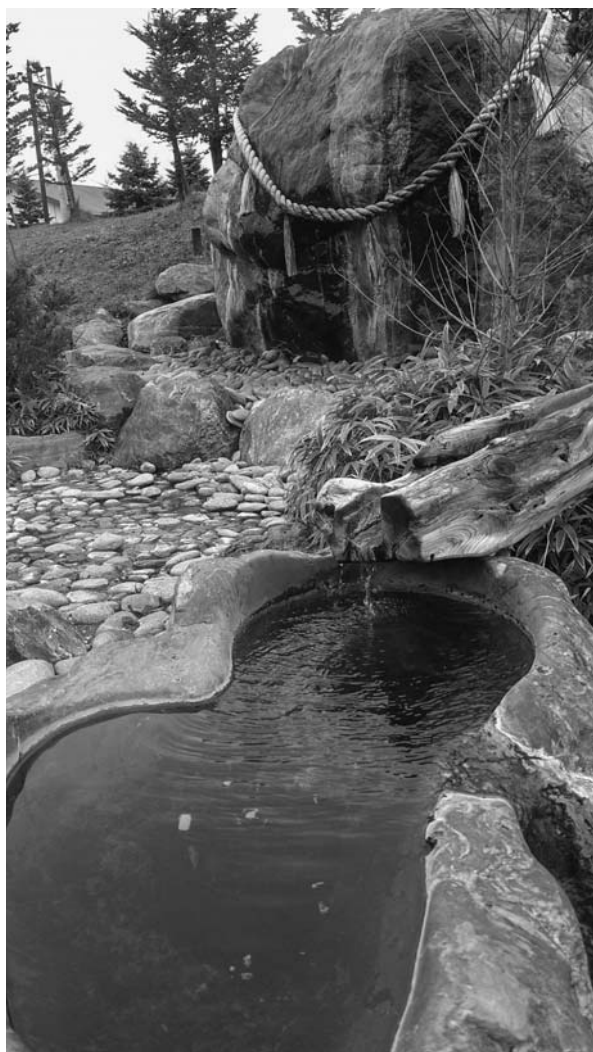
泉質はどうあれ、入浴に適した温度で温泉が湧くという事は、お湯の鮮度という面で大きなアドバンテージとなります。温泉は湧出直後から劣化が始まりますが、例えば集合管理で一旦タンクにお湯を貯め、給湯の際に加温や循環といった工程を経ると、本来源泉にあった筈の浴感は急速に失われてしまいます。一方で、函館の温泉のように源泉が熱すぎても、加水などをして適温に調整する必要が出て来ます。加水すれば当然源泉の濃度は落ちますし、給湯速度を落として源泉のポテンシャルを維持した場合、お湯そのものの回転率が悪くなり、浴客の数に比例して湯の劣化が著しく進む事になります。こうした視点から評価してみると、帯広やその近郊で湧く温泉は、道内で最も鮮度の良いお湯が楽しめる環境が整っていると言えるかもしれません。

2. モール温泉として有名な十勝川温泉

さて、そんな活きの良い温泉が楽しめる帯広市界隈ですが、冒頭にも書いた通り多くのモール泉が湧く事で知られています。その代表格として十勝川温泉が有名ですが、ドイツのバーデンバーデンと同じ泉質を持つという触れ込みで、国内でも広く知られる事となりました。厳密に言えばモール泉自体は札幌界隈でも入ることはできますし、

北海道以外では東京都大田区界隈の銭湯や、神奈川県綱島温泉、千葉県曽呂温泉など、関東地方では古くから入浴されていました。しかしこれらはいずれも冷鉱泉であり、沸かし湯であるという事から、温泉法が改正される以前は世間的に「温泉」としての認知がされていなかったようです。十勝川温泉が「モール温泉」として有名になった背景は、「お湯の温度が高かったから」というのが本質的な理由かもしれませんね。

モール泉とは腐植質(石油の手前状態の地下植物質)を含んだ温泉の事で、灰かに土の香りをしています。含まれた腐植質の濃度によって薄緑色から赤褐色へと色が濃くなり、特に濃いものだと数センチ先も見えなくなるような黒色を呈し、醤油やコーヒーと言われても違和感が無いような見



参考資料②：道の駅・ガーデンスパ十勝川温泉のお湯。琥珀色をしているが、透明度が無いわけではない。

た目になります。特に蒲田黒湯温泉など東京都大田区界隈のモール泉はいずれも相当な黒さをしていますので、学会や出張で東京に行く際は、空港からほど近い蒲田駅付近に宿を取って湯巡りしてみるのも面白いでしょう。

十勝川温泉の泉質はアルカリ性のナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉で、源泉によっては単純泉の施設もあります。色もまたそれぞれの源泉によって微妙に異なりますが、概ね紅茶のような赤みがあった琥珀色をしており、足湯程度ならしっかりと底が見える位の透明度は保持されています。この色の元である腐植質は基本的に成分分析表に記載される泉質には関与せず、表内にも記載されない事が多いのですが、中には備考欄に腐植質の量を記載してある場合もあり、お湯の色と腐植質の量に相関性があるのかを考察する材料にはなるので、気にしてみるとよいかもしれません。

お湯の供給状況は施設によってマチマチですが、帯広市内の温泉銭湯が軒並み高レベルな事もあり、通常では循環環境が必要な大規模のホテルでも、露天風呂といった一部の浴槽に源泉掛け流し環境を設けるなど、全体的に泉質を高く保つ工夫がされているようです。

また地層もやや高温の水脈を有しているようで、富士ホテルのような自家源泉を有する小規模施設では、冬場でも無加温・無加水・循環無し状態で入浴する事が可能となっています。札幌市内のモール泉と比べると泉温が高い分、熱めで湯を張っているところも多いようです。モール泉は有機物に由来する独特のトロミと肌への張り付き感があり、強塩化物泉程ではないですが、成分の割に湯冷めしにくいお湯となっています。その効能を裏付けるように、十勝川温泉は和人による開拓の進む以前から、アイヌの人々から「薬の沼」と呼ばれていたそうです。何しろ寒い土地ですから、今後もその価値は変わることなく続いていく事でしょう。

3. 秘湯が密集する然別湖・糠平湖エリア

十勝平野からやや北にある鹿追町の扇ヶ原展望台に行くと、かつての火砕流が作り出した扇状台地の様子を見渡す事が出来ます。ここから十勝平野を見渡すと、かつてこの平野に群生していた過去の植物群と、大雪山系から流れる十勝川の水、そして火山性の地熱が高温のモール泉を作り出したのだという事がよくわかります。

これは湯巡りをされていて気付いた事ですが、この扇状台地のすぐ下方にある土幌温泉はやはり腐植質と泥炭の混じる暗黄色の濁り湯をしていますが、十勝川や音更川の上流にあるトムラウシ温泉、オソウシ温泉、菅野温泉、糠平温泉、然別湖畔温泉、幌加温泉はいずれもモール泉ではありませんでした。私は地学の面では全くの素人なので、これから書くことはあくまで推測の域を出ない話ですが、どうやらこの扇ヶ原展望台が十勝地方の温泉の泉質境界地となっているようです。過去に流出した溶岩の存在が、平地と山地で温泉の泉質を

二分しているように見えるわけです。

この境界地点から奥地の大雪山国立公園一帯は、道内でも屈指の秘湯密集エリアとなっています。好奇心を刺激するようなロケーションと、独特の泉質を持つ温泉が数多く湧出しており、北海道の魅力を象徴するような温泉地帯となっています。ここで紹介するのは十勝エリアの温泉という事で、以下は大雪山系南側の温泉施設になります。

① トムラウシ温泉

(新得町 ナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉
低張泉 泉温91.2℃)

② オソウシ温泉

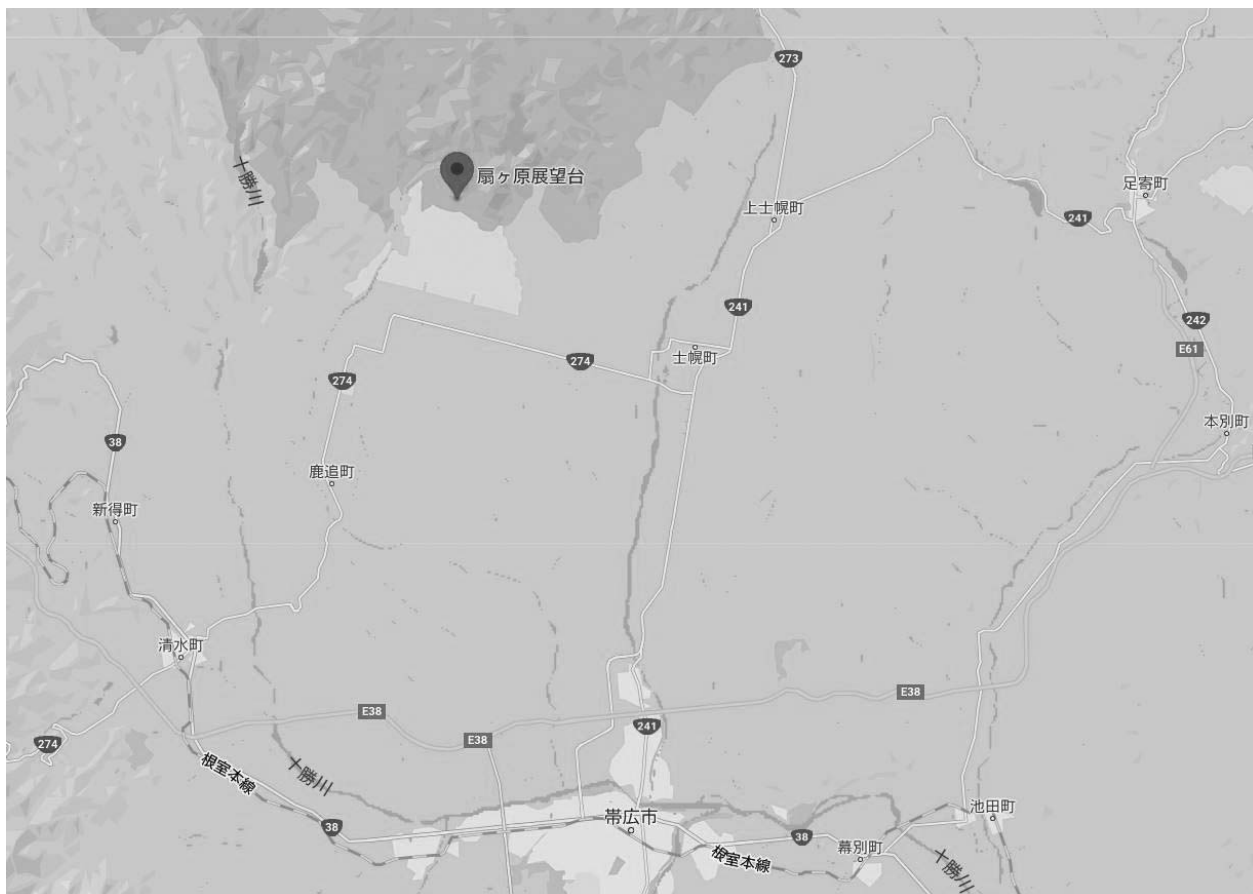
(新得町 単純硫黄泉 低張泉 泉温26.9℃)
※ pH10.0・レア泉質！

③ 菅野温泉

(鹿追町 ナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉
低張泉 泉温約41℃～56℃) ※ 複数源泉

④ 糠平温泉

(上土幌町 ナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉



参考資料③：扇ヶ原展望台から山奥に至ると、モール泉は出なくなる。

低張泉 泉温59℃)

⑤ 然別湖畔温泉

(鹿追町 ナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉

低張泉 泉温53.9℃)

⑥ 幌加温泉

(上土幌町 ※泉質詳細不明 泉温70℃)

※ 複数源泉

まず筆頭に書いたトムラウシ温泉は、約50kmもの山道を走行しないと辿り着けないという秘湯中の秘湯で、行く前にまず帰りのガソリン残量を心配する必要があるという温泉です。十勝エリアで最も行きにくい場所にある温泉であり、本州の温泉ファンにとっては憧れの一湯となっています。しかし山奥にある割にはきれいな建物をしており、快適な入浴環境を有しています。源泉は91.2℃あり、ホテルの入り口からは源泉井がシューシューと白い煙を吹いているのが確認できます。泉質は透明な低張泉で、身体への負担も少なく登山後の疲れを癒すには良い湯となっています。美瑛方面からの登山客にとっては、ゴール地点となる温泉です。

次のオソウシ温泉は以前も書いたので割愛しますが、世界的にも珍しいpH10.0の強アルカリ性泉は、是非一度入ってみるべき温泉でしょう。

オソウシ温泉の近くにある菅野温泉は最近リニューアルして、綺麗に整備された新しい浴場となっています。男女別の浴場と、貸し切り用、宿泊棟の浴場で併せて恐らく7~8つくらいの源泉があり、温泉のデパートのような環境となっています。いずれも泉質はほぼ同じながら、微量な鉄分などで性状は透明なものから少し茶色く濁ったものなど変化があり、それぞれアイヌ語にちなんだ名前が付けられていました。

全て宿の敷地内に源泉井があり、いずれも掛け流しでの提供となっています。日帰りでは入り尽くせない数の風呂があるので、ここは宿泊で利用すべきですね。

糠平温泉は国道273号線沿いにあるので比較的アクセスしやすい温泉となっています。通過した事のある人は多いと思いますが、ここでは美しい

透明な低張泉が湧出しています。成分総計でギリギリ1000mg/kgを越えている程度なので、無味無臭でほぼ単純泉と変わらない、上品な浴感が味わえます。北海道の温泉、特に十勝地方は全体的に黒いモール泉か濁り湯である場合が多い為、糠平温泉のような透明な温泉は大変貴重な存在です。湯量も豊富でお湯の鮮度もよく、身体への負担も少ないので、高齢者向けの温泉といえるでしょう。

然別湖畔温泉は自然湖である然別湖に隣接した温泉で、比較的観光色の強いホテル風水が運営をしています。炭酸ガスの豊富なナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉で、温熱効果に加えて優れた血管拡張作用を有しています。茶色く濁ってはいませんが、これは鉄分の色で、やはり腐植質は見受けられません。然別湖内で育成したオショロコマ(ミヤバイワナ)はここだけでしか食べる事が出来ない食材ですが、湖畔の棧橋からその魚群を確認する事もできるため、カヌーや遊覧船と併せて非常にアクティビティに富んだ秘湯となっています。

最後の幌加温泉ですが、存続が危ぶまれている秘湯の一つです。現在では鹿の谷という施設のみで入る事が可能で、文字通り駐車場に鹿が闊歩しているような秘湯中の秘湯です。成分分析表の揭示が無く、具体的な泉質を確認する事はできませんでしたが、4種類ほどの源泉が湧出しており、それぞれ「ナトリウム泉」「カルシューム泉」「鉄泉」「硫黄泉(露天風呂)」と表示されていました。いずれもお湯は透明なので成分はそれほど濃くないようですが、長年の給湯で浴槽がそれぞれの成分結晶でコーティングされており、「ナトリウム泉」と「カルシューム泉」は白い結晶、「鉄泉」のみが茶色い結晶で覆われている事からも、そのお湯の性質を伺い知る事が出来ました。なかなか行きづらい上級者向けの温泉ではありますが、複数の源泉を抱える幌加温泉は是非とも存続してもらいたい温泉です。

4. ナウマン温泉と浦幌留真温泉・温泉管理の難しさ

ここまで帯広界隈から山間部についての温泉を紹介してきましたが、十勝地方の大半は広大な平

地です。帯広から南東部の平野に視野を広げると、数は多くありませんが、ポツポツと個性的な温泉が点在していました。

南の幕別町忠類にあるナウマン温泉は pH9.44 の単純泉、東の浦幌町にある浦幌留真温泉は pH 9.89 の単純硫黄泉と、共にアルカリ性の強い透明な温泉が出ています。いずれも十勝平野にある温泉ですが、互いに似た泉質ながら距離は相当離れているのが興味深い点です。大雪山系の火山脈から離れているという事もあってか、地熱は低く源泉はナウマン温泉で25℃、浦幌留真温泉で29.8℃となっています。

成分総計もナウマン温泉で433mg/kg、浦幌留真温泉で213mg/kgと、両者ともかなり薄い温泉となっています。単純泉というのは成分が薄くなればなるほどアルカリ性による傾向があるのですが、これらは液中成分のイオン構成比によって決まってきます。pH に大きな影響を及ぼす成分として、ナウマン温泉では炭酸水素イオンの含有量が110 mg/kg、ミリバル比で約30%を占めており、液中の重曹成分(炭酸水素ナトリウム)が pH を高めている事が判ります。一方の浦幌留真温泉では、炭酸水素イオンは殆ど見受けられず、代わりに炭酸イオンが72.1mg/kgで検出され、ミリバル比で約62%を占めていました。やはり高 pH 温泉では液中の炭酸成分が多くなるようです。

いずれも透明な温泉であり、見た目にも腐植質の存在が否定されています。これは北海道内の温泉としては少し珍しいタイプの温泉といえますが、帯広市近郊のような地下深くの土砂類に水が染みて生じる多層型温泉とは異なり、ナウマン温泉は岩盤の隙間に水が溜まって生じる裂か型温泉らしいので、色が透明なのはそれが理由だと思われます。染みた水が岩盤層を通過する際に不純物が濾しとられ、残った炭酸水素イオンが液性をアルカリにしているというわけです。浦幌留真温泉の場合も、炭酸がガスではなくイオンとして液中に溶ける為には相当な圧力が必要となる筈ですから、やはり重い岩盤層に濾された裂か型温泉だと思われれます。



参考資料③：お湯の色も茶色く描写されており、腐植質の存在を感じさせるお湯。

両温泉とも源泉温度が低いために加温してありますが、加水はありません。自分は専門業者ではないのであまり大きな事は言えませんが、pH 9 を超えるアルカリ性温泉の場合、残留塩素(次亜塩素酸)が生じにくい事から、消毒処理にも一工夫が必要となってくるようです。その為、ナウマン温泉は残留塩素方式ではなく、少量の結合型塩素と紫外線照射を用いた複合消毒・循環方式を採用しているそうです。一方の浦幌留真温泉の方は詳細不明ですが、掲示物によると塩素消毒をしているとの事でしたので、相応量の塩素を注入している可能性があります。

消毒処理に関する詳細は、施設によって脱衣所の掲示物等にも記してありますので、入浴の際は目を向けてみる事もお勧めします。

このような消毒・循環処理は、アルカリ性の単純泉にとってはお湯の質感を棄損させる要素に間違いのないのですが、公共浴場としての安全性を担保するためにはやむを得ない処置だという事を理解しておく必要があります。そもそもの話として、還元性の高いアルカリ性の温泉は、曝気後の経時変化に加えてレジオネラ菌等の汚染も受けやすいのです。その為、pH8.5を超えるようなアルカリ性の温泉施設では、ほぼ全ての施設で安全性を維持するために消毒・循環処理を行っています。レジオネラ菌は足湯から感染して肺炎に至った事例もあるため、特に注意が必要な細菌なのです。

いつも当たり前のように入っている温泉ですが、温泉は泉質によって維持・管理方法も様々です。成分が濃ければ配管へ付着するスケール(結晶)も増え、メンテに手間とお金がかかりますし、逆に

成分の薄い温泉は品質の維持が難しくなってきました。当たり前のような温泉の背景には、隠された管理者・経営者の苦勞があるというわけです。温泉に入る時は浴槽の縁や湯口付近に付着した結晶を確認し、感謝の念を抱きながら、仏のような心で湯に浸かりたいものですね。

5. 十勝平野の外れにある奇臭泉・晩成温泉

大樹町から東の海沿いに出ると、晩成温泉という珍しい温泉が湧出しています。海に近い事もあるのか、成分総計10850mg/kgの塩分の濃い高張泉で、9.3mg/kgのヨウ素イオンを含んでいる事から、ヨード泉という泉質を全面的にアピールしています。

晩成温泉の源泉温度は12.5℃、正式な泉質名はナトリウム/塩化物泉であり、pH7.5とほぼ中性の冷鉱泉です。表記上はナトリウム塩化物泉ですが、陰イオンのうちミリバル比で約15%、成分にして1650mg/kg程が炭酸水素イオンであり、温熱効果と血管拡張作用の高い温泉となっています。色は腐植質の存在を感じさせる茶色をしています。

9.3mg/kgのヨウ素イオンは療養泉の効能としては不明な部分が多く、飲泉すれば甲状腺への効果も多少はあるのかもしれませんが、そもそも塩分が濃すぎて飲泉には不適な濃度ですので、基本的に浴用ではヨウ素イオンよりも塩化ナトリウムや炭酸水素イオンの温熱効果を期待する温泉だと思われます。

むしろ晩成温泉は113mg/kg程検出されているアンモニウムイオンに着目すべきで、入浴すれば多くの方がツンと鼻を刺すアンモニア臭に気付く筈です。アンモニウムイオン自体はそれほど珍しい成分ではありませんが、明らかに臭うレベルの濃さがある温泉は、私が確認した限り、道内では天塩温泉と晩成温泉のみです。

よく便所の匂いと例えられるアンモニア臭ですが、これらの温泉の場合は腐敗したような悪臭ではなく、どちらかというと幼い頃に学校の保健室で嗅いだ薬品アンモニア臭に近い印象です。アンモニウムイオンもまた浴用の効能としてあまり詳

しい事は判っていませんが、窒素イオンを含む化合物の代表格ですので、皮脂上の脂肪酸と結合して温熱効果を高めたり、皮膚表皮にいる常在菌の活動にも一定の影響を与えている可能性があります。

ちなみにアンモニア臭としては晩成温泉よりも天塩温泉の方が明らかに臭いが強く、こちらは浴場のドアを開けた途端に判るレベルです。慣れればどうという事もないですが、最初はちょっと驚かれる方も多いかもかもしれません。

こういった奇臭泉は上級者向けの温泉ではありますが、語り草としては大変面白い経験になりますので、是非入りに行ってみる事をお勧めします。ちなみに、同じようなアンモニア臭のする温泉は新潟県にも存在するようで(西方の湯温泉)、以前も書いた石油系温泉の件といい、どうも北海道と新潟の間には不思議と共通する点があるようです。

6. 最後に

さて今回はここまでにしておきますが、道東は十勝エリアだけでも秘湯、モール泉、アルカリ性単純泉、アンモニア臭のするヨード泉と、見どころ満載です。北海道は日に日に寒くなってきており、コロナウイルスも猛威を振るっている昨今ですが、源泉割合が高くなる温泉は冬こそが最良のシーズンです。冷えは万病の素ですので、皆さんも熱い温泉に浸かって、厳しい冬を乗り切るようにしましょう。

